

森に埋まる光の美術館

安田 幸一 研究室 ~ 建築学専攻



安田 幸一 助教授

建築家という言葉から連想されるイメージはどのようなものだろうか。一般的に考えれば建物を設計する人が思い浮かぶはずだ。しかし、「建物を設計する」という言葉が意味するものは広範囲にわたる。ただ単に建物の形を考え、それを図面として起こすことだけが、設計と言えるのであろうか。

今回は2002年の10月から東工大に助教授として迎えられた建築家の安田幸一先生を訪ね、安田先生が手掛けられたポーラ美術館の話を通じて設計という行為の一面を伺った。



環境を設計する

安田先生は大学に移る前に、大手設計事務所の日建設計に勤務していた。そこでは、鴨川シーワールドの水族館や桜田門、飯田橋の交番など、たくさんの方が利用したり目にしたりする建物を担当していた。その中でも、最も長い時間をかけて手掛けられたプロジェクトが、2002年の秋頃に箱根仙石原にオープンしたポーラ美術館である。

ポーラ美術館は自然あふれる箱根の国立公園の中に建設された。総数約9500点にも及ぶコレクションは、ポーラ化粧品の前オーナー故・鈴木常司氏が40年余をかけて収集した美術作品で、その中核をなすのは19世紀フランス印象派や、エコール・ド・パリなどの西洋絵画400点である。プロジェクトの依頼主である前オーナーは、美術館に、閉ざされた室内空間でなく、日常から解放された大自然の中で美術品と触れ合うことのできる空間を求めた。

そんな前オーナーの強い願いが叶い、1993年に美術館のプロジェクトがスタートした。会社から設計担当を任された安田先生は、この敷地の壮大な自然を初めて見たときに、「この自然を壊すような美術館は建てたくない。もし建てるなら、こ

の自然の中にいるよりも気持ちいい空間を作りたい」と思ったそうだ。

設計は、周囲の自然環境の調査から始まった。もし調査して敷地周りの生態系が保全可能であると判断できなければ、敷地を変更することも提案しようと思っていたほどだ。そのため2年の歳月をかけて、約6万平方メートルにおよぶ敷地の森の中の木一本一本から、近くを流れる沢、その中に生息する動植物や昆虫類にいたるまで、環境を構成するもの全てを調べ上げた。調査を行うにつ



自然に埋まるポーラ美術館

れて次第に範囲が広くなり、沢の上流に建物を建てた時に下流の影響はどうなるのか、地下水の流れは変化するか、工事中に地下を掘削したときに水位はどうなるかまで徹底的にシミュレーション

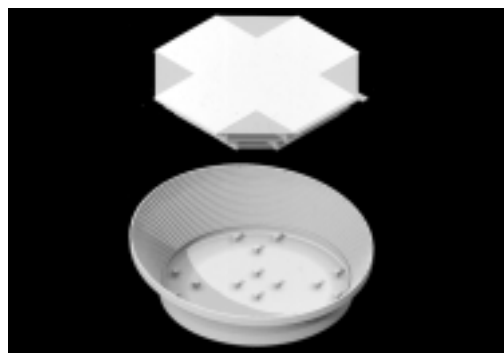


形態を設計する

環境調査により、周囲への影響を抑え建物を作ることができる判断され、実際に建てる美術館の設計が始まった。建物が自然に与える影響をできる限り小さくするために、建物が自然と接する面積を最小限に留める必要があった。すなわち円形である。最初円筒状の建物が森の中に埋まっているイメージで建物を考えていた。

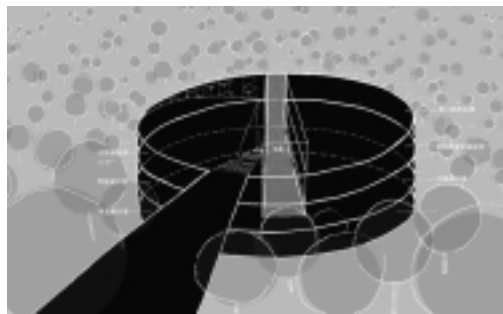
また阪神大震災の教訓を生かして、近い将来の大地震に備え建物を免震化、つまり、建物を上の美術館施設部分とそれを守る下の擁壁部分の二つに分ける必要があった。この擁壁で施設部分を包み込むようにするという案は、地震対策以外にも利点をもたらした。一つは山奥の高湿度から作品を守ることができるという点。もう一つは、建物を今までの前後左右の四方向に加えて、下からもメンテナンスすることが可能になった点だ。

設計の際に、国立公園の中に建てる美術館なので、環境省との話し合いもたびたび行われた。そのとき環境省から、「擁壁は見えないので円形でも構わないが、美術館施設部分が円形なのは国立公園内の建物としてふさわしくない」と指摘を受け、案を変更することを余儀なくされた。確かに、擁壁部分は直接自然と接するため自然を壊さないのに最適な円形になったが、その上に乗っかっている施設部分まで円形である必要はない。



擁壁と十字

を行った。建設中から完成後のことまで、自分たちが考えられる限りのことを長い時間かけてスタディする。そこまで突き詰めることで、環境への影響を配慮することができたのである。



最初のイメージスケッチ

また、法律で高さを規制されているために、円筒案では、建物が擁壁に埋もれてしまうからどうしても暗い内部空間になってしまう。コレクションの中核をなすのは、光をテーマに描かれた印象派の絵画である。何としても、綺麗な自然光が入る地下を感じさせない美術館にしたい。都内にもあるような薄暗い美術館を箱根に建てても、誰も足を運ばないであろう。

そこで再び施設部分のスタディを重ね、A案からP案まで、擁壁の内に収まる16通りもの様々な形を考えた。

その中で先生は、十字形に目を付けた。十字形というのは内部にしっかりと光を届けることができ、自然と近い関係を作ることができる。つまり、いろいろな辺から採光を設けることで、日常から離れた大自然の中にいる感覚を訪れてくれたお客さんに演出することができるのだ。さらに、真ん中にロビーを設けることで、ロビーから四方の展示空間に向かうという、初めて訪れた人にも分かりやすい動線が作られる。そのような点から、美術館部分は十字形に決まった。それに併せて、擁壁も最初に考えていた直線的なものからすり鉢状に変化していった。このような工夫は、先生が最初に抱いていた、大自然からその姿を消すような、まさに自然に埋まる建築のイメージをこの美術館に与えたのだ。



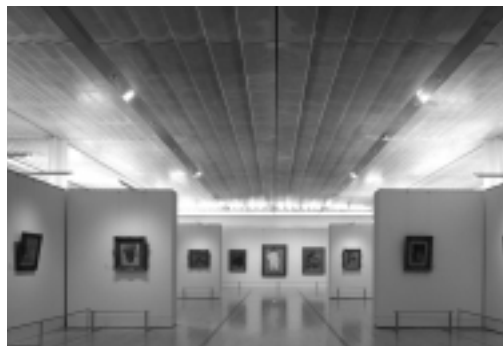
光を設計する

光溢れる空間にしたいという思いは、この美術館の設計全体を貫いている。

例えば、入口からトプライトへと続くガラスの天井を見てみよう。トプライトは下の空間に光を導くために、ガラスを使って設けられる。従来の方法ならば当然大きなガラスの板一枚だけで作れないので、何枚ものガラスを鉄骨を用いて支えるのだ。しかしその方法で作ると、ポーラ美術館のトプライトは入口から連続しているため入口からの眺めが鉄骨でほとんど見えなくなってしまう。そこで安田先生は構造設計家とガラス工事を担当するスタッフに、何とかして鉄骨をなくしてガラスだけでトプライトを作れないかと検討を依頼した。そうすれば、入口から建物を見たときに建物の向こうの小塚山まで一気に見渡すことができる。この要求はほとんど前例のないものであり、スタッフは最初、この設計者の要求を無茶なものだと思った。しかし、安田先生の熱意やこの建物のコンセプトが次第に伝わり、実験的な試みが昼夜を問わず繰り返し行われ、長い試行錯誤の末、あの重さを感じさせない、透明感あふれる入口を完成させたのである。

最も光へのこだわりが感じられる空間は展示室である。いくら内部に自然光を採り入れるといっても、それはロビーやカフェなどの二次的な空間までで、展示室にまで光を導くわけにはいかない。なぜなら大事な作品が紫外線などで痛んでしまうからだ。通常的美術館が薄暗い理由の一つは作品を傷つけないようにするためなのだ。

ところでポーラ美術館のイメージは何度も出て



写真展示室

きているように、大自然の中でフランス印象派の絵画を始めとした美術作品を鑑賞することができる空間、なのだ。印象派の絵画にとって光は大事なテーマである。展示室の光をどう作るかということは、最も時間をかけて議論が行われた。その中で館長が「パリの夕暮れの甘い光が欲しい」と主張し、みんなそれに共感した。

そのための試行錯誤を繰り返している最中に照明設計家の豊久将三さんが、美術作品に有害な波長をカットした光を光ファイバーを通して天井の小さな穴から出す照明を提案した。さっそく実物大の模型を造って光の色温度を計測してみると3,500ケルビンという夕暮れ時の太陽光のスペクトルに非常に近似していることがわかった。この照明は数値だけでなく、この建物に訪れた有名な建築家の一人が「この部屋はどこから自然光を採っているの？」と勘違いするほど、自然に近い光を創りだすことに成功したのだ。



入口から連続するトプライト



鉄骨を使った場合

プロジェクトを設計する

9年以上の長い施工期間を急ぎ足でたどってきたが、環境調査も、照明の開発も、それぞれのプロが中心となって進められた。では、現場において設計者の役割とはどのようなものなのだろうか。安田先生はいったい何を心がけて現場に臨んでいたのだろうか。

「設計者の役割は交通整理をするおまわりさんみたいなものです」と安田先生は語る。

現場には設計者だけでなく、施主、職人などさまざまな人が、施工開始前から複雑にかかわってくる。当然、彼らの意思はバラバラである。そこで設計者がその建築の方向を強く打ち出すことにより、そのバラバラな意思をひとつの方向にまとめ上げていく。このことが設計者の仕事なのだという。

ある一つの空間を考えたとき、設計者はこの空間では何が優先されるのかを常に把握して、そこを担当している作り手に伝えていかなければい

ない。また、建築というのは一つしかできないので、それぞれの専門家の全ての希望を通すのは難しい。そこで、その調整をすることが、安田先生の言う「交通整理」なのである。例えば、展示室ではそこを表現する光が一番大切だと思ったならば、光を何よりも第一優先する。作品の収蔵庫では作品を守る空調を第一優先する、といった感じである。

そしてこの「交通整理」はひとつの方向にまとめ上げていくものでないといけない。特に美術館のように使い手が不特定多数の施設は、いろいろな人に要望を言われるのが常である。設計者はそれぞれの要望に、これに対してはこう、それに対してはこう、と常に対応できないといけない。そこで、建物に共通する一貫したコンセプト、があることで、いろんな人を納得させることができるのだ。

さらに安田先生は交通整理をする上で「どうやって意図を伝えるかが大切。スタッフは、設計者がなぜこうするのかという理由を納得することで気持ちがひとつにまとまっていく」と言う。

自分の頭の中でどんなに細かく考えていても、施主や施工者には何も伝わらない。図面や模型など具体的な物を見せてこそ、はっきりと自分の頭の中のイメージを相手に伝えることができる。さらに、現場に泊り込んだり一緒に酒を飲んだりして時間を共有することで、建物のイメージだけでなく設計者の熱意も伝え、全員の方向をひとつに向けてことができるのである。



現場でスタッフと話す安田先生(中央)

ポーラ美術館について先生が考えられたことは、ここに載せきれないほどありました。しかし、それらをひとつひとつ丁寧に、何より楽しそうに語る先生から、設計という言葉は、建物を創るという行為全てを包括して使われているのだと強く伝わってきました。

最後になりましたが、お忙しい中快く取材や質問に応じて下さった安田先生に心からお礼を申し上げます。今後のさらなる活躍をお祈りいたします。(石川 翔平)

